

8月14日はザーザー降りのなか室堂から真砂沢に到着して夜まで降っていたが、夜半には止んで弱い風が吹いており朝はテントも乾くほどになっていた。

ただ、山の上部はガスに隠れている。

6時半頃源治郎尾根隊6名、八ッ峰六峰隊4名出発。

この時点で好天になる期待はあるものの雨が降るか否かは不明 [A]。



A.真砂沢 B C 発 8/15 6:32



B.源治郎尾根へのルンゼ (右) 7:16

堅い雪渓を時々スリップしながら長治郎隊と別れ、しばらくして源治郎尾根へのルンゼ入り口に到着 [B, C]。ルンゼを少し登った岩の上でハーネス等を付けて出発準備 [D]。

ルンゼ末端で準備していると、刃沢から降りてきた男女二人が横を通って登って行った、彼らも源治郎尾根に行くようだ。

ルンゼはどこでも登れそうだが、スリップしそうで微妙な感じ [E, F]。少し登ると右岸側に踏み後がありそちらへ登る。後で分かったことだが、このままルンゼを登って行った方が時間短縮になったようだがこの時はただ踏み後をたどって行った。



C.ルンゼへ 7:26



D.ルンゼ末端で出発準備 7:47



E.出発約5分後 8:14



F.微妙なバランスを超えて 8:15



右岸側の尾根に出ると更にしっかりした踏み後があり、10mほど上で水の滴る垂直の岩場で先行パーティーの女性が四苦八苦している。だが我々6名が揃う頃には女性は抜けて行った。

我々もザイルを1本出して小生がトップで取り付き、A0をがっちり使って登り、他の人をぐいぐいとつり上げる。その上は水が洗った後のような小さなルンゼ状の道になる。この小さなルンゼのような道をたどって登っていくと、岩に大きな這い松がおおい被さり登りにくそうな岩場に出る。前の人が左から覆っている這い松の下をくぐって行ったので小生は這い松を避けようとして右から取り付いたが靴がぬれていたのかスリップしてズルズル落下。けがなどなかったが結局左から登っても見た目より悪くはなかった。

その上の10m程の岩場も全員ロープを使ってクライミング、今回2回目のザイルワーク。しばらく行くとやっと尾根道に出て周囲が見渡せる [G, H]。



G. やっと尾根道 10:20



H. 尾根道を上へ 10:21

尾根道を歩いていると左も右も切れ落ちている岩場に到着 [I]。

Ⅲ級程度の岩場だが、スリップしたら下まで落ちそう。躊躇なくザイルを出す。この上も岩が続き、やはりFIXを張る [J]。



I. 左右切れ落ちた岩場 11:18



J. その上の岩尾根 11:37

しばらく歩くと源治郎I峰へ続く尾根に出て、快適に登っていく。

尾根から左のルンゼ状の所を登るとちょっとしたテラスに到着し、休憩。

後で考えるとここで下降の決断しておけば良かったかなと思う、この時午後0時半頃。

もう少しもう少しという期待と、少なくともI峰までは登ろうという希望が交錯。

それが決断を鈍らしたのかも。

いよいよここからI峰への登りとなる。

20～30m程登っていくと傾斜が急になりロープを出してアンザイレンする。

25m登り更にその上に25m登ったところが今回の最高点で下降を決断、この時午後1時半頃 [K]。

全員登ったところで懸垂下降の準備。

大きめの這い松に捨て縄をセットして懸垂下降開始。這い松は少し揺れるが懸垂には問題なさそ

うだ、垂壁ではなく傾斜があるので。

50m 全員下降して回収しようとロープを引っ張るがびくとも動かない。

この頃ポツポツ降り出し、前刃方向では雷がごろごろ鳴っている、こちらに移動して来なければいいが。どう引いてもびくともしない、仕方なく小生が登り返すことにする。

ザイルを伝って支点まで来てみると、ザイルが這い松にあちこちで触れており摩擦で引けなかったようだ。25m での懸垂に直して下降し、そこで次の 25m をセットして下降。元に戻って来た頃には服もザックもびしょびしょに濡れている。この下の休憩したテラスから牧野に FIX を張ってもらい他の人はそれに伝って 50m 下降。更にその下も 50m の FIX を張って下降。

そこからガレ場状の所を通過するがここも FIX で下降。

その先は灌木の中の道でノーザイルにて歩いて下降。適当な灌木に支点を作り 50m の FIX を張る、この後半は左右に切れ落ちた岩場で登りにザイルを張った所だ。

4 名が下ってくる時は明るかったが、後方の 2 名が下降の頃にはライトが必要になった。

最後の隅田は暗くなったので FIX 下降でなく、懸垂に直して 50m 懸垂となる。

この下に 25m 懸垂をして他の人が下降するのを待っているが、最後の隅田が下降して来るのに 1 時間半かそれ以上かかったろうか、ながーい待ち時間。

この辺りでザーと雨が降ってきた。長い雨降りになるのだろうかと思っていたがそのうちに止んできた。この後は降ることもなく弱い風が平蔵谷側から吹いておりそれほど寒くはない、しかし雨で冷えた体には少々寒々しい。オレンジがかった三日月が刃御前の上辺りにあり多少明るいし、別山乗越と刃沢小屋の明かりも見えておりそして星が少し。

その月も数時間で刃山荘の向こうへ隠れてしまった。この先もピッチ毎にながーく待たされる羽目になる。ザイルとスリング・カラビナを後方から前方の人へ渡し、50m の懸垂をセットして下降。

この頃はまだ 50m の懸垂をしていたが、曲がり角があるとザイルを回収できず回収に登り返したとのこと、ということで 25m の懸垂に変更。

また、ザイルはその都度たたんで運んでいたが、たたむと手間がかかるし何より絡んでやりにくいことおびただしい。よってトップが懸垂ザイルをセット時に他のザイルを引っぱって下ることにしたら順調にできるようになった、支点は殆ど灌木を使用。

この頃だったろうか、真砂から交信がありカレーライスを作って待っているとのこと。

こちらは遅くなりそうなので先に寝ておくように伝えるが、実際は真砂も安心して寝ていられる状態ではなかったようだ。

ヘッドライトに 10 年前から使っている電球式のを持っている人が約 1 名。

新しい電池を入れてきたらしいけれど、途中で電池が切れてしまった。

この時トランシーバーの電池を電灯に使用、それも数時間でダメに。当然トランシーバーは使用不可。残った 1 本と弱った方の電池と入れ替えて何とか使える状態だった。

電球式は 3～4 時間しか保たない、やはりライトは LED に限る。

さて、そこから 25m 懸垂を何回繰り返したのだろうか。

小さなルンゼ状のルートに入り、大きな灌木が無いので大きめの木に捨て縄をセットして支点とする。



K. 最高点から 25m 下にいる人 13:29



そこから 25m 懸垂すると右岸側に直径 1m 程の木に捨て縄がかかっている。  
その下を照らすと何となく登りに最初にザイルを使った所のように見える。  
下ってみるとやはりそうだった。行きに A0 で登った垂壁で、岩の直ぐ下がルンゼルートへ続く  
トラバース点だ。ルンゼへは行かず、踏み後をそのまま下へ下る。

この下の懸垂をセットしているとだんだん白んでき、下の雪渓もよく見えるようになってきた。  
最後の 25m は踏み後がしっかりしており、雪渓の近くまで歩いて下る。  
ここは懸垂ザイルは不要かもしれないが、一晩通して動いて疲れている事だし新人もいる、更に最後  
の締めが肝心と言うことでここも 25m 張るように上に指示。  
踏み後そのまま下ると雪渓の小さなシュルトに突き当たるけれど、5m ほど下流側が雪渓とつなが  
っているのだから雪渓に着地、この頃朝 5 時半になっていた [L]。  
ザイルを撤収してアイゼンを付け、真砂沢のテント場に付いたのは 6 時半。  
昨日朝 6 時半に出発してから、24 時間経過していた。

真砂のキャンプ場で（トランシーバーで話  
の出た）おいしいカレーライスをごちそう  
になった。もちろんその前にビールをごちそ  
うになったのは言うまでもない（昨夜遅く  
小屋の人を起こして購入しておいたとか）。

高橋は仕事の都合で今日帰らなければ  
ならないので、食事後休んで 11 時頃吉岡と  
ハシゴ段経由で帰って行った。



L.雪渓に下り立ったところ 8/16 5:33

この日 16 日は寝たり食ったりそして寝たり、所在なく一日過ごす。  
17 日は 8 名、ハシゴ段経由で黒四ダムへ帰ったが、疲労がたまったせいかきつい帰路だった、8 時間  
ほどの行動。

ザイル操作、スリング等の使い方、セルフビレーのセット方法、コールのかけ方、等・・・など問題  
の多い山行であった。

しかし、全員 6 名怪我・事故もなく無事に帰ってきたことは良しとしよう。  
更に「もう歩けません」などと、ひ弱な発言が無かったのも GOOD かな。

以上